

団体名		特定非営利活動法人 INE OASA い～ね！おおあさ http://www.e-jyan.jp/00_ine/index.html (広島県大朝町)	
団体の概要	活動開始年	西暦 2001年 1月 活動開始 西暦 2001年 11月 特定非営利活動法人格取得	
	メンバー 人数	<役員数> 8名 <事務局スタッフ数> 1名(無給) <ボランティア数> 16名 <賛助会員数> 18名	
		構成	会社員、会社経営者、団体職員、地方公務員、自営業者、農家
	予算規模	平成13年度概算(12月決算により、14年度の暫定) ・収入 5,564,581円 ・支出 4,405,181円	
団体の目的		菜の花から「資源循環型社会の実現」を目指す。 大朝町の限りある自然を大切に、環境保全を訴え、実行することにより、地域住民の意識改革そして循環型社会の実現につながればと考えている。この町で生まれ、この町で育ち、この町で生活する喜びを全ての人に感じられる町にしていきたい。	

ボランティア活動の概要

“甦れ!(よみがえれ)おおあさ”をメインテーマに、空き農地を利用した「資源循環型リサイクルのまち」づくりに取り組んでいる。

その第一弾として、休耕田を有効利用して菜の花を栽培すること、廃食油を回収して住民の意識の改革をすることの、2つの事業を先行して行っている。次に住民の目に見える形として、BDF精製プラントを購入し、集められた廃食油から二酸化炭素の排出の少ない軽油の代替燃料であるバイオディーゼル燃料(BDF)に精製し、スクールバスの燃料をつくり児童の登下校に使用している。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

団体の代表者は室内装飾の仕事に就いており、溜まっていく古畳・内装材の廃材を見ながら、何か解決策はないものだろうかと考えていた。一方で、経営する内装店を構える商店街では8店が閉じ、町の衰退状況にも危機感が募っていた。また、大朝町は農業が主要な産業であるにもかかわらず、後継者不足や減反政策などにより休耕田が増加するといった問題も深刻化していた。そうしたなか、町外の友人が環境ビジネスに取り組んでいると聞き、一緒にリサイクル商品の販売・企画に携わるようになり、日本全国各地を廻って行く中で“菜の花プロジェクト”を知った。その奥の深さに感動し、これからの中山間地域の問題として、取り組むべき要素が多分にあると確信した。

2000年9月に「何かしなければ町は変わらない」という思いを持った仲間が集まり、ITの推進と菜の花を活用した循環型社会の形成を目指す「みらいかいはつ提案書」を行政

に提案した。この提案書に賛同した 20 歳台から 30 歳台を中心としたさまざまな職種の仲間が 20 名近く集まり、「IT & 菜の花 ECO のまち ‘おおあさ’ 実現プロジェクトチーム」が発足した。その後、頭文字をとり、NPO 法人取得を目指して「INE OASA(い~ね! おおあさ)」を設立し、新たなまちづくりへの取り組みのひとつとして、“菜の花プロジェクト” を始めた。

ボランティア活動を行う上での困難点と工夫

大朝町は、自然が豊かで「水・空気」がきれいな町であり、それが住民にとっては当たり前のこととなっている。こうした意識のなかでは、「環境問題」「循環型社会」といったところで、他人事としか思わない人がほとんどであった。

そこで、廃食油を原料にしたディーゼル燃料で車を動かすイベントを企画したり、滋賀県で実際に菜の花エコプロジェクトを展開している中心人物である生活協同組合の理事長を招いて講演会を開いたりして、住民への活動の周知と理解を得ていった。また、月刊広報紙「なのはな広場」を全世帯に無料配布して、廃食油の回収という身近で簡単なことから始められることを呼びかけた。

こうした地道な意識啓発活動により、行政集落単位で月に 1 度の廃食油の回収への協力が広がった。また、休耕田を提供してくれたり、そこでの菜の花栽培に取り組んだりしてくれる「なのはな応援団」もできた。現在は、小学校や中学校でも、総合的な学習の時間で菜の花エコプロジェクトをとりあげ、菜の花の観察、刈り取り、搾油、調理実習等を体験学習している。

活用した支援

廃食油を BDF に精製するための燃料化プラントを購入するため、1 口 3,000 円で町内外の住民に寄付を呼びかけたところ、活動に賛同してくれた人たちから 200 万円を超える寄付を集めることができた。この寄付実績と NPO 法人の承認を得たことで、広島県共同募金会から 200 万円の援助、大朝町から 200 万円の援助をもらうことができた。

全国各地で展開されている菜の花エコプロジェクトの中で、民間主導で立ち上がり運営しているのは初めての例である。行政からは上記の助成のほか、メンバーが作成した原稿をもとに、広報紙を印刷して町の配布物のなかに折りこんで一緒に全戸配布してくれるといった側面的な支援を受けている。

今後の課題と展望

安定した事業展開のためにも、報酬のある専任スタッフを雇用したいと考えている。また、活動のコアメンバーであるボランティアスタッフ（正会員）の増員も課題である。人のつながりを大事にしながら、計画、実行、反省を繰り返し、有効かつ必要性の高い事業展開を行っていききたい。

(事務局スタッフによるレポート、事務局スタッフへのヒアリング調査、団体資料より作成)



< ホームページ >

< 事例のポイント > 地球的課題を身近な問題に

環境分野の活動は、地球的課題である大きな問題を伴うことから、危機意識を身近に感じない人からは、ともすると関心の得られない活動となってしまう懸念がある。しかし、この事例では廃食油の回収という身近な活動から始めることで、環境問題を他人事でない自分達の問題であるという意識に転換させることに成功している。

また、BDF を活用したスクール（兼巡回）バスの車体には「この車は廃食油のリサイクル燃料で走っています」と表示され、天ぷらの匂いをふりまきながら町中を走っているという。こうした工夫も、循環型社会の必要性をわかりやすく訴えとともに、その成果も実感することができるため、協力している人々の誇りにもなっていると考えられる。

< 事例のポイント > 地域との連携に力を入れた、まちづくり活動でもある

講演会の開催、地域説明会の開催、広報紙の全戸配布、学校教育への協力など、様々な媒体を使って地域の人々へ働きかけている事例である。その結果は、プラント導入の資金協力や、菜の花の作付け面積の拡大といった形であらわれている。特に、住民から 200 万円を超す寄付を集めたことは、他にあまり例をみない大きな成果であろう。

もともとは、商工業・農業等の地域経済基盤の弱体化に対する危惧から端を発している活動でもあり、プロジェクト推進による効果は、地域循環型社会の構築のみならず町の活性化に波及するものと、住民から大きく期待されているのだと言えよう。

2003 年 4 月には全国菜の花サミットが 2 日間にわたって大朝町で開催されることになっており、人口 3 千人の町に全国から人が訪れる。こうした賑わいの創出も、菜の花エコプロジェクトを町ぐるみで推進するような体制を目指して、INE OASA のボランティアが地域に働きかけたことで可能になったと考えられる。地域の多様な機関との連携が、ボランティア団体の活動を活性化させるとともに、その成果をより大きなものにできている事例である。